

荒川清秀著

中国語を歩く——辞書と街角の考現学

東方書店／2009年10月／304頁／1890円



守屋宏則

看板など、中国の街中で見られる中国語を写真に撮り、それを素材に何か書こうと私も考えたことがある。しかし本書で紹介されているように『中国語の「看板」を読もう！』が出たので「あ、やられた」と思い、あきらめた。それもあるが、荒川さんも述べているように中国でおもしろそうなものを撮影しようとする「アブナイ」こともある。そのためにわざわざ望遠レンズを買ったくらいだ。小型カメラをポケットやバッグに入れて、昔使ったレリーズなどで隠し撮りするテクも必要だろう。わが国でもスパーなどは「撮影お断り」と小さく書かれていたりする。台北のスーパーの食品売り場で商品名を小さなノートにメモっていたら、マネージャーと思しき男性に「先生……」と咎められたことがある。

著者の荒川清秀さんと初めてお会いしたのはたしか三〇年近く前。大阪で開かれた日本語教育関係の研究会であった（と記憶する）。当時私は大学院修士課程をおえたばかりで日本語教育に携わっていた。荒川さんはすでに愛知大学の専任

講師だったと思う。誘われて喫茶店でしゃべりした。正直言つて関西人のパワーに圧倒される思いだった。何を話したかまるで記憶にないが今でも覚えていることがある。荒川さんはこう言つた。「年に大中小と三本は書く」。この言葉は深く心に沁み入つた。以来、私も「年に大中小三本」を目標にしてきた。達成できた年もそうでない年もある。近年は年に一本すらアヤシイ。

○語学とともに生きる者にとつての目標というか課題というか任務というか、私が考えるのは「学生への教育、専攻分野の研究論文執筆・学会発表、研究書及び学習書の執筆、教科書制作、辞書編纂、○○語学習普及への貢献……」などである。まだあるがどうせそんなにはできっこない。しかし、驚くべきことに、荒川さんは以上のすべてにおいて群を抜いた業績をあげておられる。

業績面において私は荒川さんを羨んだりしない。荒川さんは早くから学界のホープと目された俊秀である。かてて加えて人の数倍以上の努力を惜しまない。

努力というより好きでやってるんだろうなという感じ。羨ましいのは、荒川さんは青年のように若々しいことだ。とてもアラカンには見えない。ドイツ語を学んだり、ピアノをひいたり、運転免許をとつて令夫人を恐怖に陥れたり……。愛嬢への愛情も満ち溢れ、家庭円満（そうに見える）。非のうちどころなし。あ、もう一つあった。本書一六六頁「わたしは研究室に八段の書架を二五本置いているが……」。そんなに置けるなんて……羨ましい。

このたび『中国21』に掲載する書評執筆の御依頼をいただいた。四〇〇字詰二〇枚と紙幅も十分にある。拝読した感想を書き連ねてみたい。

『現代漢語詞典』第五版は「現漢」、『講談社中日辞典』第二版は「講」、小学館『中日辞典』第二版は「小」、『新華字典』は「新華」とそれぞれ略記する。

本書のあとがきに「本書は『東方』誌の連載が五年目に入った「やっぱり辞書が好き」のこれまでの原稿と、「日本と中国」紙の連載コラム「漢字のチカラ」

をミックスして再編集したもの」とある。前者は毎月楽しみに拝読し、辞書について毎回目からウロコが落ちる思いをしている。「やっぱり好き」というだけあつて辞書の収集、内容への目配りは常人の遠く及ぶところではない。二一九頁の『現代漢語短語解析詞典』は「東方」連載を見て、ただちに東方書店に購入発注した。まだ未入荷。後者は初見。荒川さんの凄いとところは短いコラムの中に中国語文法論・語彙論の最新の研究成果が盛り込まれていることだ。日頃の勉強・研究の賜物だ。本書全体が「オモシロイ」が、「漢字のチカラ」は「超オモシロイ」。

◆4頁「牙科」をさがして
そうか。やはり「牙科」の看板は見当たらないのか。拙著『ことたび中国語』（白水社、二〇〇二年）では北京・上海で撮った写真をちりばめたが「牙科」の写真が撮れず、一九九五年に貴陽の街角で撮ったものでごまかしたことがある（写真一）。

（写真一）

◆6頁 他にこんなものも

“成人保健”は北京の裏通りをぶらついていると意外に多く目に入る。目には入るが恥ずかしくて中に入ったことはない。台湾の九份の街の坂の曲がり角に“保険套世界”という店があった(写真②)。大陸では“安全套”。街角に自販機があるのが目に入る。買ったことはない。

◆8頁 “推”

「ずり落ちてきた眼鏡は……“推”を使って“推一下”という」。勉強になった。

◆9頁 “拉”

私は“拉”というと、タクシー運転手に“拉不拉?”(行ってくれますか?)と聞くのが連想される。最近では言わないような気がする。私は中国で腹をこわすことはめつたにないが、学生を連れて行くと必ずあるのが“拉肚子”(下痢をする)。

◆10頁 “折”

中国語で割引の“打折”以外に“折”の字が使われる単語はあまりない。強いて挙げれば“折扣”以外には“折刀”

“折叠”“折椅”“骨折”くらいしか思いつかない。が、私は元雑劇の“第③折”を思い出す。元曲を読まなくなって久しい。

◆16頁 “打包”

“打包”に“带走”(テイクアウト)の意味があるのを初めて知った。今年の九月、二年ぶりに北京に行き、喉が渴いたのでマクドナルドに入ったらバイク配達の子が店内で休憩していて吃驚した。ゼミでそういう話をしたら「日本でもモ

スパーガーはデリありますよ」と学生に教えられた。上海の南京東路にあるマクドナルドに時々入る。ハンバーガーは食べない。お目当ては“奶昔”(マックシェイク)。この店は“带走还是在這裡喝?”と聞かない。なぜならテイクアウト専用の窓口があって、並ぶ列が違うから。これは頭腦的だと感心した。

◆16頁 “打的 打车”

タクシーは“出租汽车”と教わった。この発音が苦手だ。映画「ジャスミンの花開く」でチャン・ツイイー演じる女性が産気づいて雨の中で“出租车、出租



写真2

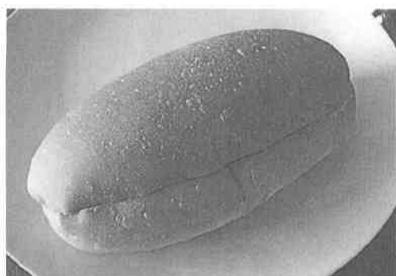


写真1

車！”と叫ぶシーンが印象的だった。関連して、45頁「包」で「ひとところ北京で一〇キロ一〇元で走っていた、こつペパンに似たタクシーは「面包車」と呼ばれた」は荒川さんの記憶違いか？

子供の頃よく食べたこつペパンは写真3の形状だった。あの黄色いミニパン型の、切る前の食パンのようなタクシーは「面的 mian di」と呼ばれていたと記憶する。「面包車」というと私はマイクロボスを連想する。ポケ始めているので自信なし。

写真3



◆48頁 単語にならない語素にも注意を今夏、初級教科書の原稿を書いている

てはたと気づいた。方位詞の一覧表はこれまで当たり前のように単音節方位詞「上、下、前、后、左、右、里、外、对、旁、东、南、西、北」を挙げてきた。二音節方位詞「对面」「旁边(儿)」「

の隣の欄の「对」と「边(儿)」、「旁」と「面」が交わる所は空欄にしてきた。

「旁」は「两旁」のようになるし、「小」には「从旁插嘴」という例がある。しかし「对」は単音節方位詞とは言えないのではないか？『中国語わかる文法』(興

水優・島田亜美著、大修館書店)は一音節方位詞に「旁」「对」を挙げていない。この考えが正しいのかもしれない。『応用漢語詞典』は「名」旁边；附近」とする。しかし、権威ある『現漢』は①

名方位詞」とする。悩むところだ。

◆56頁 「儿」は子ども？ 息子？

「わたしは愛用する『常用俗語手冊』北京語言学院出版社、一九八五……」。本の写真も載っている。私も俗語を調べる時はまずこの本を見る。二四年前の本

か？ 今の学生諸君は持っていないだろうなあ。

◆60頁 「停」

「停」と「止」の違いについて考えたこともなかった。やはり目のつけどころの違いだ。『現漢』をひいてみた。「停

①動停止：「止」停止：「哈、哈、

哈。『現漢』の編者の先生方も外国人がこんなふう調べるなんて想像もしなかつただろう。わかるのは「停」は動詞として単用でき、「止」はできなさそうだとということか。

◆61頁 「门」

「快门」とはなにか。これはカメラのシャッターのこと。中国語を学んだことのない人には「快门」という漢字は意味不明だろう。余談だが、デジタル一眼レフのシャッターボタンを押すと「カシャツ」という心地良い音が出るが、あれはわざわざ人工的に音が出るようにしてあるものとカメラ好きの学生に教えられた。確かに銀塩フィルムの一瞬レフのようにミラーが動くわけではない。静かすぎるハイブリッドカーに擬似エンジ

ン音をつけるようなものか。

◆66頁 『生』

日本語の「生」は好イメージで、中国語の「生」はその逆という説明を読んだことがある。そのとおりだろう。

「生ビール、生放送、生中継、生演奏……」。麻雀の「生牌」の「生」が「生詞」の「生」と同じと知って得心したことが思い出された。

◆69頁 『清』

以前、中国に滞在中、中国人の先生に「日本語の「精算」と「清算」はどう違うか？」と聞かれて、うーむ、と思ったことがある。中国語の「清算」は政治上の事柄の他に男女関係について言うこともある、と教わったが、「現漢」にはかような下世話な説明はない。②列挙全部罪悪或错误并做出相应的处理」とあり、「講」「小」ともほぼこれを踏襲する。日本語の「過去を清算する」は男女関係以外にも使うか不明。「現漢」に「精算師」という語があるのに気づいた。大取穫だ。個人的好みで言うところ「還清」の「清」の結果補語用法が好きだ。

『現漢』は「還清」を見出し語に掲げないが、『講』『小』がともに「還清 huánqīng」とする。『応用漢語詞典』には「……、一輩子也還不清。」という例文があり、間に「不」が入る。

◆71頁 上海における普通話の普及
「上海の街では驚くほど普通話を耳にした」。最近、上海の子どもたちは家では上海語だが、学校に行くと子ども同士の話は普通話だと聞いた。私は東京生まれ・育ちだが、大阪や京都ではどうなのだろう。

◆72頁 『刷卡』

「刷卡」は以前荒川さんにメールでお伝えしたことがあるが、一九九六年に北京のホテルで宿泊代をクレジットカードで支払った時、なにやら機械を取り出してきてカードと紙を置いて、それこそ「シュワッ！」とカードの浮き出た文字を複写紙に写しとったことが思い出される。今はどうか知らないが、以前、中国の学生はジーンズを洗濯するのにタワシで「シュワッ！」とこするようになって洗っていた。

◆74頁 『倒垃圾』 『拨电话』

一九八五年リリースの小林明子「恋に落ちて」の歌詞に「……ダイヤル回して手を止めた……」とある。この歌は「金妻」の主題歌にもなった。当時拙宅の電話機はまだダイヤル式だった。数年前、知り合いの編集者が何かの後記に「最近テレビのチャンネルを回しても……」と書いてあるのに気づき、「お宅のテレビはまだチャンネル回すの？」とからかったことがある。「現漢」の「拨号」の語釈が工夫されているのを発見した。「小」の「拨号」は「電話の」ダイヤルを回す」である。

◆78頁 『查房』

「查房」の意味の派生はメトニミー
こういうところに気づく荒川さんはやはり感覚が鋭い。以前、北京のカラオケのお嬢さんから「查車」という語を聞いた。辞書にはなさそうである。調べるのは車体ではない。深夜、タクシーに乗っている男女の素性を警察が調べられることを言うらしい。経験はないので確証はない。

◆103頁 “送”

「それならあっさり半額で売ってくれ……この店の場合是在庫を一扫したいからそんな方法に出たのだろう。そうかも知れない。しかし、前にテレビ番組で、ある中国人が「中国人は『买と送』が好き」と言っている場面を見たことがある。半額で売るか『买一送一』にするかは日本人の好みか中国人の好みかの問題かも。初めて『买一送一』を見た時、私も違和感を感じた。「だったら半額にしてよ」。同じ感覚だ。

◆104頁 頻度順と歴史順

辞典における多義語の語義の配列は重要である。『新華』の語義の配列は少なくとも日本人中国語学習者にとっては不便なものが少なくない。もともと外国人学習者のために作られた物ではないので、こういう文句を言うのは筋違いであることは言うまでもない。『講』の「売り」に「語義の派生ツリー」があり、辞書編纂という観点からは賞賛に値する試みだと思うが、学習者の一人として見た時、果たして便利かどうかは議論の余地

があると思われる。電子辞書がこれだけ普及してくると画面の縦スクロールに対する心理的抵抗感が重要になる。頻度順がいいか歴史順がいいか？ 大問題である。日本人中国語学習者としての立場から勝手なことを言えば、「日本人学習者にとつての」便利順がよい。

◆114頁 “卫生紙”とは？

「……、②は女性の……」知らなかった。『応用漢語詞典』『小』『講』『東方中国語辞典』にもそうある。私は「卫生巾」と教わったが、この語を使ったことはない。

◆115頁 “同居”はいつも「同棲」？

中国（の大都市）では「若者のルームシェア」が日本より普及しているようだ。日本人は「個室」が好きである。私の以前のゼミの男子学生は台湾留学中、男女三人で3DKくらいのマンションをルームシェアして、その中の女性と恋仲になり、ついには結婚するに至った。大都市の若者に限って言えば「同居」「同棲」とはならないように感じる。

◆116頁 “情人”は恋人？ 愛人？

私はテレサ・テンの「空港」が好きだ。酔っぱらえばカラオケで歌う。原題は「情人的關懷」。この「情人」は恋人か？ 愛人か？ 歌詞には「どうぞ帰って、あの人のもとへ」とあるから彼氏には妻か恋人がいるのだろう。上記の問いには迂闊には答えられない。私がしばしば留学生に「おもしろいでしょ？」と示すのは「恋人」「日」「情人」「中」「愛人」「韓」。小学館『日中辞典』第二版で「愛人」をひくと「情人」とある。一考の余地ありだ。

◆166頁 中国の辞書はハードカバーがお好き？

高校生の頃だったか？ 革装の英和辞典を買ってその手触りを楽しんだ記憶が蘇った。人工皮革だったかも知れないがビニール装とは一線を画すものだった。布製のバッグのほうが軽くて機能的だが、私は授業で学校に行く時はほぼ革の鞆である。やはり革は良い。「ビニール装は表紙の端がめくれあがるから、……ハードカバーの方が好きだ」。ふーん。私が愛用している『新華』は一九七二年

版。大学一年生の時に買ったものだ。これは紺色のビニール装だが、薄く柔らかく端がめくれあがらない。めくれあがらないよう大事に使っている。紙質も薄くてしなやかである(厚さ約二〇ミリ、重さ約一八〇グラム)。一九八〇年に買ったものはえび茶色のビニール装で、これは厚くて硬くて一部はひび割れており、紙質も粗くて厚い。いい紙が作れなかつた時代なのかも。しかしこれには「四角号码检字表」がついているので大切に使っている。私は部首索引より四角号碼のほうがひきやすい。二〇〇六年に買った『大字本 新華字典』は字も見やすく、「四角号码检字表」もついでいて便利だが、ついつい使い慣れた小さいほうが伸びる。『新華』第一〇版は何種類か持っているが二〇〇五年に買ったものは「双色本」で定価一五元。今年買ったものは単色で定価一六元である。

もちろん『新華』はよくひくが、私が好きなのは『小学生字典』(商務印書館 国際有限公司、二〇〇一年)。荒川さんも他所で述べておられる漢字の筆順も示

されているし、随所にちりばめられた絵が楽しい。二〇〇三年夏に、日本人中国語教師のためのセミナーを行った南開大学の蘆福波さんが「椅子」は「把」で数える、と教えると日本人は首をかしげるけど、どうしてよ?! というので「これを見れば一目瞭然」と『小学生字典』の「椅子」の挿絵をコピーしてプレゼントした(図一)。私たちの世代は小学校の教室の椅子を思い浮かべれば

図一



「把」で数えることがよくわかる。そろそろ紙幅が尽きそうだ。最後にひとつだけ。

◆196頁 英漢より漢英のほうが充実している理由は

「しかし、日中辞典について言えば、……、わたしはあまり利用した記憶がない」。後のほうでフォローはされているが、「やっぱり辞書が好き」だったら日中辞典も活用していただきたい。私たちの世代は電子辞書への抵抗感がけっこうあるようだが、多くの電子辞書には日中辞典も搭載されていて、手軽に利用できていると思う。小学館『日中辞典』第二版の編集委員としては、ついつい『日中辞典』の肩を持ちたくなる。

荒川さん。これからも元気で中国語を歩き続けてください。私も離されても離されても、後からトコトコついて行きま